

# 閃めく想い 雨音多一



菅野ミナミはデッサンをしていた。線を重ねることは努力である。努力の積み重ねが輪郭を形づくる。間違えても、少しブレてもいい。それが新しい入力となる。一ミリ違えば、万・億の違いが生まれる。それは個性ですらあるのだ。

菅野ミナミは十八歳の画学生。専攻は抽象美術。コンセプトワークによる現代美術を得意としていた。ミナミのもう一つの顔は、「似顔絵作家」だ。アートイベントなどに出店しては、来場した人の似顔絵を描くアルバイトをしていた。

五月のゴールデンウィーク。イベント会場は、晴天のためもあり人々で賑わっていた。

「こんにちは」

「……今日、最初のお客様だ。」

テントを張ったミナミのブースに、初老の女性が入ってきた。うすく化粧をしており、髪は良く整えられていた。

「似顔絵、お願いできるかしら」

「勿論です。宜しく申し上げます。料金はこちらのメニューをご覧ください」

ミナミはそう言うと、B5のメニューを見せた。

「ありがとうございます」

初老の女性はしばらく考えた後で言った。

「……これにするわ」

女性を選んだのは、一番安いデッサンのみのコースだった。別なコースでは、イラスト調にアレンジしたコースもある。時間と写真を貰えるなら、油絵で写実的にも描いてみせた。さまざまなタッチ、それがミナミの個性だった。

「だから作風が定まらないのよ」

同級生の中村友美は繰り返す。

「いいよ、作風なんて」

「まあ、アナタの場合、それでいいのかもね」

中村友美との会話はいつもそんな感じである。

「では、描きはじめます」

「宜しくね」

三十分位で一作品描くのがミナミのペースである。今日の初老の女性も、調子よく描きはじまった。

「貴女、お名前は何とおっしゃるの？」

女性が尋ねた。

「はい、菅野です。菅野ミナミ。今、美大の三年生なんです」

「あら、そうなの」

「ええ」

「ご実家から通ってるのかしら」

「いえ、安アパートなんです」

「そう」

二人は時々会話を交わしながら制作を進めた。

「今年、この街へ引っ越してきたのよ」

「ああ、そんなんですか」

「雪が心配なの。前のところ暖かったから」

初老の女性はそう言うと、軽く微笑んだ。その含み笑いは上品で、美さえ感じさせた。

「……この表情を描こう。」

ミナミは練り消しを使って半分位を消した。絵に熱が入る。

そうしているうちに、絵が描き上がった。

「完成です」

「ありがとうございます、ミナミさん。これ、お代ね」

「ありがとうございます」

絵を持ってブースを出て行く女性を、ミナミは見送った。

五月の第二日曜日、ミナミのアパートの外は薄暮を迎えていた。携帯を操作して、ミナミは母親に電話をかけた。  
「もしもし、お母さん？」  
「どうしたの」  
「うん、ちょっと声が聞きたくなくて……」  
「あら、そう」  
「今日は、『母の日』ね」  
「ああ、そうだった」  
「いつも有難う」  
「ミナミが元気なら、それでいいのよ」  
ミナミの母はそう呟いた。声が少し涙声になっていた。  
「うん、元気よ。とても」  
「絵の方はどう？」  
「相変わらずよ」  
「友美さんだっけ。お友達とは仲良くしているの？」  
「うん、まあ。時々ケンカもするけど、仲良くしているわ」  
「じゃあ、切るね」とミナミ。  
「元気だね」

暮れゆく空を見ながら、ミナミは人を想った。人間は何と大勢存在するのだろうか。そのうちのごくわずかとか、話すことはできない。その数は本当に少ないと、ミナミは実感した。そして、その少数でさえ、その人たちの何を知っているというのだろうか。性格・好み・癖……。たとえば、中村友美ひとりでさえ、全てを理解しているとは言い難い。ミナミの知っている人の何億倍もの人が、この星で生き、暮らしているのだ。ミナミは思わず身震いした。

―――私は、何と小さい存在なのだろう。  
ミナミはもう一度、携帯を手を取った。中村友美に電話するためだ。先程の想いが、ミナミを駆り立てていたのだ。

「……もしもし、友美？」  
「うん。どうしたの」  
「急に声が聞きたくなくて」  
「ならいいけど、『母の日』なら、かける相手を間違えてるわよ」  
「そっちは、さっき済ませたよ」  
友美はしばらく笑った。そして、声を整えた。  
「ところで、ミナミ」  
「どうしたの」  
友美は真剣な声になった。  
「今度、新しいギャラリーで個展をしてみない？」  
「……個展か。どんなギャラリー？」  
「蔵を改装したギャラリーで、カフェも併設しているの。ミナミさえ良かったら今週にでも見に行かない？」  
「本当にありがとう、友美。火曜はどう？ 午後から授業の空き時間があるんだ」  
「大丈夫。火曜にしよう。午後二時から？」  
「うん。じゃ学校で待ち合わせる？」  
「そうだね」

ミナミは遠くの相手と話せる事を幸せに思った。テクノロジーは空間を超えた。その時、絵はどうだろうか。写真なら、空間を超えることができる。しかし、未だ本物の絵はどこにでも行ける訳ではない。リアルな物体はそこにしか存在しない。だから絵に会いに行くのだ。そう、画廊や美術館に。その出会いは、本物である。

「ここね」  
 ギャラリー『瞳』という真新しい看板が目飛び込んできた。  
 「割と綺麗ね」  
 アーチになったバラの垣根をくぐると、整然とした佇まいの蔵があった。庭が広く、外にテーブルと日傘になるテントがある。  
 初夏の日ざしが優しい風と共に心を和ませた。  
 「いらっしやいませ」  
 出迎えたのは、齢七十才位の翁である。ミナミは思わず人なつこい顔を観察した。  
 「……タヌキに似てるかも」  
 ミナミは一人笑みを洩らした。

「こんにちは。このギャラリーの関係者様ですか？」  
 中村友美が気さくに話しかけた。  
 「そう、オーナーの江戸川です」  
 「実は、ギャラリーをお借りしたいのですが可能でしょうか。私ではなく、こちらの……」  
 「はい、私、菅野ミナミと申します。私の作品を展示したいのです」  
 「是非、展示させて下さい」江戸川は面相を崩した。  
 「どんな作品を描くのですか」江戸川はそう続けた。  
 「描く、というよりは創ることに近いんです。現代抽象美術です」  
 ミナミはそれを一息で告げた。友美が間に入る。  
 「五十号位のものが多いのですが、こちらには、どの位の数を展示できますか？」  
 「中へどうぞ。実際にご覧ください」  
 江戸川はそう言う中へと先導した。  
 一階はカフェスペースになっていて、大きな壁画が特徴的だった。百号二枚は大丈夫です、と江戸川が解説する。その言葉を、  
 友美はメモしていた。  
 「ええと、カフェのメニューブックは有りますか」  
 「ああ、それならここに」  
 江戸川はそう言って、メニューブックを手渡した。  
 「素敵なつくりですね」  
 ミナミが溜め息をついた。  
 どれどれ、と友美も覗き込む。  
 「いいデザインでしょう。私の孫娘が造ってくれたんです」  
 江戸川はそう言うと、誇らし気にしばしの沈黙をつくった。  
 「今日ももう少ししたら、このギャラリーに店番として来る予定なんですよ」  
 「そうでしたか」  
 「ええ、土曜日や日曜日には店番をしてくれることも多いですよ」  
 そう言って江戸川は笑った。

「二階も見せて頂けますか」  
 「勿論。行ってみましょう」  
 三人は奥の階段を昇った。あまり広くない階段に、搬入は大丈夫かな、とミナミは考えを巡らせた。  
 「まあ」  
 大きなキルト作品が、二人の目に飛び込んできた。  
 「こういった展示を常設展の時にするのです。キルトは、亡くなった女房の趣味だったので……」  
 そう言うと、江戸川はしばらく沈黙した。  
 「素敵な作品ですね」  
 ミナミは心を込めてそう語った。  
 「有難う。あの世で女房も喜んでくれると思います」  
 「ミナミさんは、作品を創る時どういう風に考えるのですか」  
 江戸川が続けて尋ねた。ミナミの何処かに亡き妻を重ねているようだった。  
 「はい。コンセプトを立てて、それを組み合わせたり、入れ替えたりするのです」  
 「随分と変わってますね」と江戸川。  
 「そうなんです。菅野さんの場合は、コンセプトワークに基づくものが多いですよ」  
 「もうひとつには、似顔絵があります」  
 「ミナミ、それは今はやめて」  
 「……うん」  
 友美が小声でたしなめた。  
 「実は、作品のポートフォリオを持ってきたんです。ご覧になって頂けますか」  
 「勿論、喜んで」

三人は一階に戻ると、テーブル席に向かい合って座った。友美が鞆からファイルを取り出して、テーブルの上に広げて見せた。  
 ほお、とか、へえと江戸川は見ながら呟いた。  
 「これなんですけど……」中村友美の説明に熱が入る。江戸川はどこかうわの空で聞いているようだった。  
 「……以上です」  
 「するとこの『空を仰いで』という作品をメインで展示したいんですね」  
 「はい」  
 「あの、企画展になりますか。それともギャラリーを借りるにはお金がかかりますか？」ミナミが口を挟んだ。  
 「貸しギャラリーになります。この作品なら充分展示できますよ」  
 「良かった」友美が溜め息をついた。  
 「お幾らぐらいですか？」  
 「値段は、ええと……」

その後、トントン拍子に打ち合わせは進んだ。費用は安くはないが、作品が売れば充分支払える。案内状やポスターの手配もある。結局、個展は十月に決まった。

「友美、今日はありがとう。今度お礼するね」

「うん。好きでしているから、余り気にしないで。それより……」  
「ん？」  
「今度、私の似顔絵も描いてくれない？」  
「……友美」  
「名刺に入れたいのよ」  
「有難う」  
「私も、人を好きになれそうだよ」

「人間の個性」とは何だろうか。それは、違いである。Aという人間は、Bという人間と違う。同じだから良いとは限らない。それは印刷物と美術品の違いである。  
人の顔が一人一人違うように、絵もまた違うのだ。抽象画も似顔絵も、その点では同じだと友美は気づいたのだった。

「人を好きになれそうよ」  
友美はもう一度、そう繰り返した。

(結)

## あとがき

---

### <謝辞>

この本を電子出版するにあたっては、担当編集者の捷雄さん、Big.Sさん、まりこさん、風間さん、飯田さん、こすずさん、Bellyさん、百合子さん、都穂さん他多数の方々に大変ご尽力いただきました。この場を借りて、御礼を申し上げます。有り難うございました。

雨音 多一

### <ご注意>

映画化・ゲーム化・コミック化・アニメ化にあたっては、著作権料をいただきます。必ず、右記メールアドレスまでご連絡くださいませ (qqgr3ww9k@snow.ocn.ne.jp)。

別途、契約が必要となります。  
通常印税は、総売上の5%となります。

よろしくお願い申し上げます。

### <発行年月日>

初版        2018年（平成30年） 6月14日（木曜日）

閃めく想い

<http://p.booklog.jp/book/122509>

著者：雨音多一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/taichi-amane/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122509>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト